

霞が関ビル アジアの民族音楽 コンサート

2012年3月21日(水) 18:30~19:30

霞が関ビルロビー階 溜池側にて



サワン・ジョシ

楽器：シタール



アブドゥール・ラーマン

楽器：タブラ



アブドセミ・アブラフマン

楽器：ラワーブ

曲目

1. バハルホシャリキ (春の喜び)

アブドセミ・アブラフマン (演奏者)

冬が去り、すべてのものが息を吹き返し、生命が大地に躍動する春の情景を描いた音楽。

2. ディリクエイ (心の響き)

アブドセミ・アブラフマン (演奏者)

ウイグルのカシュガル地方の名曲である。人々はゴビ砂漠の周辺に位置するオアシスに生活しており、その厳しい状況を意味する。曲のテーマは、人生の夢や希望、満たされぬ恋愛、当時社会の不満などである。70年代にタンブールのソロとして演奏され、有名になった。

3. ラーガ・カーフィー (Raga Kafi)

サワン・ジョシ (演奏者)

ラーガとは旋法でも言われ、旋律を構築するための規則である。このようなラーガは数百であり、その一つはラーガ・カーフィーである。この曲はラーガ・カーフィーに基づくシタールでの独創即興演奏である。

4. バサンタ (Basanta)

サワン・ジョシ、アブドゥール・ラーマン (演奏者)

バサンタはサンスクリット語で春という意味です。本曲はネパールのカトマンズ盆地に伝承されてきた春の曲です。

5. パハーディー (Pahadi)

サワン・ジョシ、アブドゥール・ラーマン (演奏者)

この曲はネパールの山と高地の自然を表現する曲です。ネパールの山を中心に住んでいる民族の民謡をベースにして即興演奏する曲です。

6. タブラ・ソロー

アブドゥール・ラーマン (演奏者)

16拍子による北インド古典スタイルのリズムあるいはターラを中心とするタブラのソロ。

7. 出会い

3人で演奏

ウイグル、ネパールとバングラデシュの音楽と各国の文化を表現する3人の合奏。

※曲目は変更される場合があります。



当日、中央共同募金会の募金箱を設置し、東日本大震災義援金を募集いたします。

霞が関から



POWER OF CULTURE

東京藝大プロデュース 霞が関ビル アジアの民族音楽コンサート プロフィール



サワン・ジョシ

1977年ネパール、カトマンドウ生まれ。14歳からシタールを学び始め、北インド古典音楽の学術を習得。1998年ネパール全国器楽コンクール1位。2000年来日、各地でコンサート活動を行う。海外公演も多数。2003年にソロアルバム“Swotanttra”をデビュー。2004年東京藝術大学大学院音楽研究科に入学し、2010年3月に音楽学博士の学位を取得。現在東京芸術大学音楽部で教育研究助手として所属。演奏活動としてインド・ネパールの古典音楽ベースにジャンルを超えた音楽活動を繰り広げている。

楽器：シタール

北インド古典音楽の代表的な弦楽器である。インドの他にネパール、バングラデシュ、パキスタンでも古典楽器として使われている。現在のシタールは18～22弦で、棹は長さが約90cmで約20個の金属製のフレットが結びつけられている。フレットの上には約6～7本の金属製の演奏弦が張られており、左手の指で弦を押さえインドという奏法（チョーキング）により1フレットにつき4～5度音をだす。右手につけたミズラブ（金属製の爪）で弦をはじいて演奏する。フレットの下には約12～16本の共鳴弦が張られている。



アブドゥール・ラーマン

バングラデシュ出身。6歳よりタブラーをロスゼン・アーメッドに師事。1988年度と1992年度の青年音楽賞をバングラデシュ国文部省より受賞。バングラデシュ国営テレビの奏者としても活躍。2004年に国費留学生として来日。日本国内公演が多数。2005年東京藝術大学大学院音楽研究科に入学し、2010年3月に音楽学博士の学位を取得。現在東京芸術大学音楽部で教育研究助手として所属し、演奏活動を続けている。

楽器：タブラ

タブラ"とは、アラビア語起源の言葉で“太鼓”を意味する。高音と低音のふたつの太鼓を、指や手のひらで叩く打楽器であるが、叩く場所によっていろいろな音色ができるようにつくられ、それぞれの音に呼び方があり、叩きかたを言葉で憶えてゆくという仕組みになっている。高音の太鼓（ダヤ＝右）は、正確に音を調律して（主音または副主音に調律）演奏する。また、低音の太鼓（バヤ＝左）の皮を手で押さえたり、擦ったりして、歌のような表現が出来るように、いろいろな技術が考えられている。



アブドセミ・アブドラフマン

新疆ウイグル自治区ウルムチ市生まれ。小学5年生の頃からラワーブを学び、1983年、新疆芸術学院音楽学部に入學、ラワーブを専攻。1987年から新疆芸術学院音楽学院専任講師（在籍中）。2001年大阪芸術大学で作曲理論を学び、2002年4月東京芸術大学大学院音楽研究科（民族音楽学専攻）に入學。2004年3月修士の学位を取得。2005年4月東京芸術大学大学院音楽研究科博士課程に入學。2009年3月博士の学位を取得。2009年4月一東京芸術大学音楽学部教育研究助手を勤め、2010年4月から日本学術振興会外国人特別研究員（JSPS）。ウイグル自治区をはじめ、中国各地で演奏活動、1999年にロシア・シベリアのバルナウル、モスクワで開催された国際演劇祭に出演、特別賞を受賞。2001年北京でウイグル12ムカームのCDを演奏。2005年日本『大シルクロード音楽舞踏祭』総監督を担当。来日して以来、日本各地で国際音楽祭、コンサートを出演。

楽器：ラワーブ

カシュガル・ラワーブの素材は桑材あるいはアンズの木から作られている。共鳴胴は半球状の一木彫りで、半球に切った部分の表面に皮を張っている。皮はロバや羊といったウイグル民族の居住地域に多く生息する動物の皮で、特別の場合には蛇の皮を張る。独奏や合奏、踊りの伴奏、そして語り物の伴奏音楽として用いられる。全長91cm、弦は金属で七本のものである。